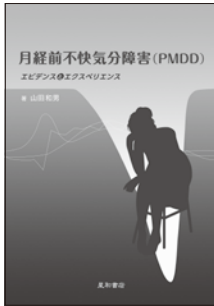


■ 書 評



月経前不快気分障害
(PMDD)
—エビデンスとエクスペリ
エンス—

山田和男 著
星和書店
2017年3月 112頁
本体価格 2,300円+税

現行のDSM-5の前の版であるDSM-IVの巻末には「付録のリスト」があり、この中に「今後の研究のための診断基準案」として、いくつかの疾患が並べられていた。その1つに、月経前不快気分障害 (premenstrual dysphoric disorder: PMDD) という病名があったことに気づかされていたであろうか。このPMDDは今回のDSM-5で正式に抑うつ障害群のカテゴリー下に置かれることになった。とはいえ、この疾患の名前自体まだ広く知られていない。いわゆる月経前症候群や月経前緊張症などとはどう異なるのであろうか。また、わが国の精神科の臨床場面でどれくらいの割合で遭遇するのであろうか。ほとんど婦人科を受診するのではないか。などなどいくつか疑問がわいてくる。

厚生労働省はすでにわが国の実情にあった「エビデンスに基づいた月経前不快気分障害 (PMDD) の薬物治療ガイドライン」を2011年に公表している (改訂版は2013年)。本書はこのガイドラインの作成者でもある著者が、一般精神科医向けに執筆したPMDDの解説書である。決して分厚いものではない。A5判で100ページあまりの書である。この中に、PMDDに関する基礎知識、診断、鑑別診断、治療、「PMDDは誰が見るべきか？」などが順番に要領よく説明されている。

第1章の「PMDDとは」では、「PMDDとは一言で表現すると、『月経の前ごとに (非定型) うつ病を呈する疾患』である」という文章で始まる。ざっくりとした定義から始まり、その後により詳しい説明が続くというのは著者の面目躍如とするところである。読者の頭が読むごとにすっきりと

整理されていく。しばしば挿入される図や表も丁寧に作成されている。

PMDDの診断にあたってはDSM-5の診断基準の理解が必要である。ここでも、実際の臨床場面で精神科医が評価に困りそうな点について、十分な解説がなされている。実はこの本の副題は「エビデンスとエクスペリエンス」となっている。エビデンスばかりでは堅苦しく融通の利かない治療となってしまうがちである。エビデンスを理解した上で、患者さんにとって最適な治療を探すとすると、個人の経験 (エクスペリエンス) も重要である。この点で、女性の精神保健に詳しい著者は抜かりがない。読者になるほどと思わせる記述があちこちに配置されている。

治療法については抗うつ薬やホルモン剤などの紹介がある。これも本書の特徴であろうが、著者の詳しい漢方療法なども簡潔に説明されている。ここでも海外の治療ガイドラインを紹介するだけでなく、わが国の実情にあった治療法も提案されている。

治療についての最後の2章は、「間歇療法か連続療法か」と「いつまで治療すべきか」というPMDDならではの疑問に答える形になっている。PMDDの抑うつ症状が月経と関連した一時的なものであれば、間歇療法でもよさそうであるが、普通のうつ病ではこのような考え方はしない。また、連続療法となればずっと抗うつ薬を服用しなければならないし、どこまで続けるかも問題となる。著者によればこの選択はなかなか難しいらしい。エビデンスを踏まえながらも著者の経験を加味した判断が詳しく紹介されている。

最後の章はこのPMDDを精神科医か産婦人科医のどちらが診るべきかという問題を扱っている。著者の立ち位置は明確である。PMDDの重大な鑑別すべき疾患は精神疾患であることから、精神科医が診るべきで、PMDDが診られないというのは精神科医の不勉強であるというのである。たしかに、抑うつ症状を伴った若い女性が多く受診する外来では、PMDDの患者さんが隠れている可能性がある。本書はそのような外来で勤務している精神科医に強く推薦したい。

(仙波純一)